

継承語に関するナラティブ研究の方法論的課題：在日ベトナム系移住者の事例から
Methodological Challenges in Narrative Approach in Heritage Language Research: A Case Study of Vietnamese Immigrants in Japan

林貴哉 (HAYASHI Takaya)

「継承語」という用語は、言語環境が異なる地域を移動した移民が、移住先で二世以上世代にわたって生活しているという状況において使用される。親子関係を例にすると、親世代が故地で使用していた言語を移住先で生まれた子ども世代も習得・使用している／していないことに焦点が当てられる。親子の関係性の中に存在する概念であり、それ自体が実体として存在するわけではない。本発表では実体としては捉え難い「継承語」についてのナラティブを、インタビュー調査から引き出すための方法論を検討する。

「継承語」に関する研究には、継承語教室での実践に携わる人々を対象とした研究だけでなく、継承語教室に通っていない子ども世代を対象とした研究もある。後者のように具体的な言語教育実践に立脚せず、インタビュー調査のみを行う「継承語」研究の場合、調査者の想定する「継承語」と調査協力者の想定する「継承語」に差異が生じ得る。ある人にとっての継承語は、親世代の暮らしていた国家の公用語や国語のように規範性を伴う言語とは限らず、また、親世代が故地で使用していた言語は、単一ではない可能性があるためである。さらに、インタビュー調査では、他者とのコミュニケーションの経験を調査協力者に問うことになるため、コミュニケーションの経験についての認識にもずれが生じ得ることを念頭において聞き取りを進めることが重要となる。

調査協力者にとっての「継承語」はどのような言語で、それはどのように経験されてきたのか。調査者の前提を問いながら調査を行うために、本発表では「本質主義的言語観に基づくインタビュー」と「構築主義的言語観に基づくインタビュー」という二つのモデルを提示する。本質主義的言語観に基づくインタビューは「継承語」と見なされるある特定の言語についての経験を調査協力者が有していることを前提として実施される。一方、構築主義的言語観に基づくインタビューでは、言語の実体はインタビューの場面での相互作用の中で立ち現れてくると考える。本発表では関西地方におけるベトナム系移住者を対象とした調査に基づいて後者について論じる。